『ミダラノヌマ、第三章より抜粋』

「あはぁ……愛して差し上げますわ。ンッ、ちゅッ」

気がつくと、静乃は亀頭に口づけしていた。

フタナリ美少女の亀頭は、想像していた以上に熱く、唇を弾き返すような弾力に富んでいて、背徳的な興奮を煽る。

「んふぅ！　んっ、ちゅっ、ちゅっ……あふ……ちゅぷ……んふむぅ……」

張り詰めた先端に押し当てていた唇を開き、亀頭を呑み込んだ人妻は、ツルリと滑らかな表面に舌を這わせ、先端の敏感そうなワレメを舌先でなぞり上げ、カリのくびれを唇で締めつけながら、断続的に吸い上げる。

「あはぁぁ！　あんッ！　奥様のお口、熱くって、トロトロで、気持ちいいですっ！」

拙いながらも、情熱的な人妻のフェラチオ奉仕を受けた瑞羽のペニスは、ビクビクと嬉しげな痙攣を起こす。

（感じてくれてる……）

フタナリペニスの敏感な震えに淫情を煽られた夫人は、無意識のうちに頭を振りたくり、頬をすぼませて、男根への奉仕に没頭してゆく。

強く吸い上げ、口腔粘膜を駆使して擦り立てる口の中で、亀頭はさらに熱く堅く張り詰

め、先端のワレメから大量の先走りをビュルビュルと溢れさせた。
「んぁ……ちゅぷ……お汁が出てきましたわ。気持ちいいんですね？」
水飴のように濃厚な先走りの体液を舌の上で転がしながら、フェラチオ奉仕に酔った人妻は、切なげに歪んだ瑞羽の顔を見上げて艶めかしい声で問いかける。
「ひぅ！　ンッ、奥様ぁ、きっ、気持ちいいです。もっと吸って、舐めてくださいぃ」
「ええ、もっと吸ってあげますわぁ……はむ、んふぅ。ちゅぱちゅぱちゅばちゅばずちゅるるるッ！」
震える声でおねだりされ、フェラチオ奉仕にさらに熱が込められた。
すぼめた頬に、丸く張り詰めた亀頭の輪郭がくっきりと浮き出し、肉胴をきつく締め付けて密着した唇が、唾液と先走りの混合液に濡れ光りながらヌムヌムと注挿される。
「はぁぁん、凄いッ！　奥さまぁ、凄く……きっ、きもちいいですぅ！」
静乃のフェラチオ奉仕に合わせて瑞羽も遠慮がちに腰を使い、ソフトなイラマチオで人妻の喉粘膜を掻き擦る。
（あぁぁ……お口を……喉をオチンチンで擦られるのが、こんなに気持ちいいだなんて……知らなかったわ……）
人生初体験のイラマチオ快感に陶酔しながら、静乃はフタナリペニスを貪り続ける。
次第に濃厚さを増した精臭が頭の芯まで突き抜け、絶頂の余韻が残る秘裂が甘く痺れ疼

いて新たな淫蜜を噴きこぼしていた。
「んふ……ちゅぶちゅぶちゅぶ……ずちゅるるっ。ずちゅううっ、ちゅばちゅばちゅばじゅるるるるうぅぅぅ〜ッ！」
唾液の鳴るはしたない音を立ててペニスを貪り吸いながら、淫情に酔った人妻は豊満なヒップをくねらせる。
「あはあぁぁ！　オチンチン、痺れて……蕩けちゃう。奥さまぁ、射精……しちゃいそうですぅ！」

『ミダラノヌマ、第五章より抜粋』

「ご苦労だったね、寺部。ご褒美に、好きな方を犯させてあげよう。どっちにする？」
茂樹の言葉に、静乃がハッ！　と顔を上げ、触手と融合した夫の顔を凝視する。
「では、奥様の方を……」
寺部は即答した。
「やっ！　いっ、嫌です！　やめさせて、茂樹さんッ！　いっ、嫌あぁぁぁ！」
半狂乱で哀願する夫人は、抵抗も虚しく、老執事の足元まで触手に引きずられてゆく。

「どうしてこんな酷いことを？　静乃さんは心からあなたを愛しているんですよ！」
瑞羽の声を聞いた茂樹は、ニヤリ、と好色な笑みを浮かべた。
「愛しているからこそ。その献身に報いて、ありとあらゆる快楽を静乃に体験させてやろうというのだよ。夫の前で犯される背徳の快感……その甘美な味を、ね」
目の前で老執事に犯されようとしている妻を見る夫の目は、慈愛に満ちていた。
「やっ！　嫌ぁぁぁ！　寺部さん、やめてぇ！　止めなさいッ！　命令よ！」
「そんなに毛嫌いしないでください、奥様……ああ、柔らかで、いい匂いだ」
メリハリに富んだ白い裸身を悶えさせて叫ぶ静乃を背後から抱きかかえた老執事は、汗と粘液にまみれた豊乳を荒っぽくこね回しながら、細く引き締まった人妻のうなじにネットリと舌を這わせる。
「やぁ、嫌……はぁん、あ、あんッ！」
肩口や喉元を執拗に舐められ、乳首を摘んで揉み転がされているうちに、静乃が上げる拒絶の声に甘く艶めかしい響きが混じり始めた。
先ほどまで、淫魔の触手とペニスにさんざん嬲られ、数えきれぬ絶頂を味わった肉体は、老執事の執拗な愛撫に敏感に反応して燃え上がっているのだ。
「ここも、旦那様に随分可愛がっていただいたようですな。もう、トロトロに濡れて開ききっていますよ。ご賞味させて頂きます」

「ふぁ！　あぁぁぁあッ!」
後背位で尻を掲げた姿勢で石床に這わせた静乃の股間に、寺部の顔が埋まった。
ぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃ、じゅるっ、じゅぱ、じゅぱっ、ちゅううっ！　じゅるるるっ、ちゅばちゅばちゅばちゅばっ！
生々しい舌なめずりと吸い音を立てながら、老執事は人妻の秘部を執拗に食る。
「あひいいいっ！　やっ、あっ、くううぅぅぅんんっ！　ダメぇ……吸っては……ふわぁぁんんっ！」
「ああ、奥様のお汁、大変美味しゅうございます。柔らかな肉穴の奥から、止めどなく湧き出しておりますぞ……膣奥に垣間見える粘膜襞の淫らな蠢き、堪りませんな」
口元を女蜜で濡れ光らせた老人は、目の前でヒクつくヴァギナを惚れ惚れと鑑賞しつつ、言葉責めで羞恥心を煽る。
「やあぁぁ、寺部さん、もう、もうやめてください……これ以上されたら、私、変になってしまいます」
ビクッ、ビクッ、と裸身をわななかせて哀願する静乃であったが、その媚態は若き人妻に妄執を抱く男の欲情をかえって燃え上がらせてしまう。
「遠慮せず、どんどん変に、淫らになってください。おや、こちらの蕾も可愛らしくひくついていますな？　静乃奥様は、こんな所までお美しい……ご賞味、御免ッ！」

「きゃはあぁううんっ！」

熱い唇が肛門に吸い付き、ざらついた舌が放射状の小皺を捩れさせて動き始めると、静乃は恥悦に裏返った悲鳴を上げ、豊かな尻を痙攣させた。